

東アジアにおける霊長類マカク属の進化史：頭骨内部構造の変異と系統的意義 Evolutionary history of macaques in East Asia: internal cranial morphology and its phylogenetic significance

伊藤 毅^{1*}, 西村 剛¹, 高井 正成¹

ITO, Tsuyoshi^{1*}, NISHIMURA, Takeshi¹, TAKAI, Masanaru¹

¹ 京都大学霊長類研究所

¹ Primate Research Institute, Kyoto University

マカク属 (*Macaca*) は、ヒト以外の霊長類で最も成功した属の一つである。約 20 種の現生種は 4 つの種群に分類されるが、このうち *fascicularis* 種群と *sinica* 種群は、アジアの熱帯から温帯にかけての広い範囲に分布している。東アジアにおいて、前者は後者よりも高緯度に分布している。中国北部の前期更新世の堆積物から見つかった化石種、*M. anderssoni* の頭骨化石は両種群の進化史を理解する上で重要であるが、その系統的位置は *fascicularis* 種群に近縁とする立場と *sinica* 種群に近いとする立場に議論が割れている。本研究は、マカクにおける頭骨内部構造の種間変異とその系統的意義を評価し、*M. anderssoni* の系統的位置を再検討した。結果、鼻腔の形態変異は生息環境よりも系統関係をよく反映することが示された。最節約復元に基づくと、*sinica* 種群に見られる洋ナシ型の鼻腔形態はマカクの中で派生的な形質状態であると推定された。*M. anderssoni* は洋ナシ形の鼻腔を有し、*sinica* 種群との近縁性が示唆された。以上の結果から以下のような進化プロセス仮説を提案した。*sinica* 種群の祖先的集団は前期更新世に中国北部に分布していたが、その後南下し中国南部やインドシナ半島の限られた地域に収縮した。一方、*fascicularis* 種群は中期更新世以降に東南アジアから東アジア北方に進出し、比較的高緯度地域にまで分布域を広げた。このような両種群の東アジアにおける分布域の交替劇は、後期更新世の気候変動の結果生じたと考えられる。

キーワード: 更新世, 古生物地理, 鼻腔, 上顎洞, コンピュータ断層撮影, *Macaca anderssoni*

Keywords: Pleistocene, Paleobiogeography, Nasal cavity, Maxillary sinus, Computed tomography, *Macaca anderssoni*